寺山修司

詩集

角川書樹事務所

CamScannerでスキャン

人生処方詩集

故郷の母のことを思い出したら 10
海が好きだったら 12
星を数え飽きたら 14
さすらいの途上だったら 16
もしも住む家がなかったら 18
恋人に歌ってあげたかったら 21
幸福が遠すぎたら 22

『マザー・グース』より

「メリーさんの　羊は」 26
「ポケットにライ麦いれて」 27
「とうしゃう」 28

〔てんと虫〕 29
〔まき毛の〕 30
〔ロンドン橋が　落っこちた〕 31
〔ハンプティ・ダンプティ　塀にすわって〕 34
〔ひとりものの婆さん〕 35

『われに五月を』より

五月の詩 40
三つのソネット
〔少女に〕 43
〔ぼくが小鳥に〕 44
〔桜の実のうれる頃〕 45

CamScannerでスキャン

少女詩集

汽車 48
てがみ 50
見えない花のソネット 52
子猫（こねこ） 54
しみのあるラプソディー 56
時は過ぎゆく 58
あなたに 60
けむり 62
種子（たね） 64

短歌

初期歌篇（かへん） 68

CamScannerでスキャン

第一歌集『空には本』抄 74
第二歌集『血と麦』抄 79
第三歌集『田園に死す』抄 86
未刊歌集『テーブルの上の荒野』抄 91

俳句

初期句篇 96
第一句集『花粉航海』抄 102

その他の詩篇

幸福についての七つの詩 110
事物のフォークロア 115
愛について 120
飛行機よ 122

あなたへの手紙 125
わが谷は緑なりき 126
世界の一ばん遠い土地へ 128
かなしくなったときは 130
懐かしのわが家 134

歌謡詩集

ふしあわせと言う名の猫 138
裏窓 140
山河ありき 142
生れてはみたけれど 144
かもめ 146
山羊にひかれて 149

巻末エッセイ　天童荒太

本文イラスト　西淑

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

故郷の母のことを思い出したら

時には母のない子のように
だまって海を
見つめていたい

時には母のない子のように
ひとりで旅に
出てみたい

時には母のない子のように
長い手紙を
書いてみたい

CamScannerでスキャン

時には母のない子のように
大きな声で
叫(さけ)んでみたい

だけど心はすぐかわる
母のない子になったなら
どこにも帰る家がない

CamScannerでスキャン

海が好きだったら

水に何を書きのこすことが
できるだろうか
たぶん何を書いても
すぐ消えてしまうことだろう

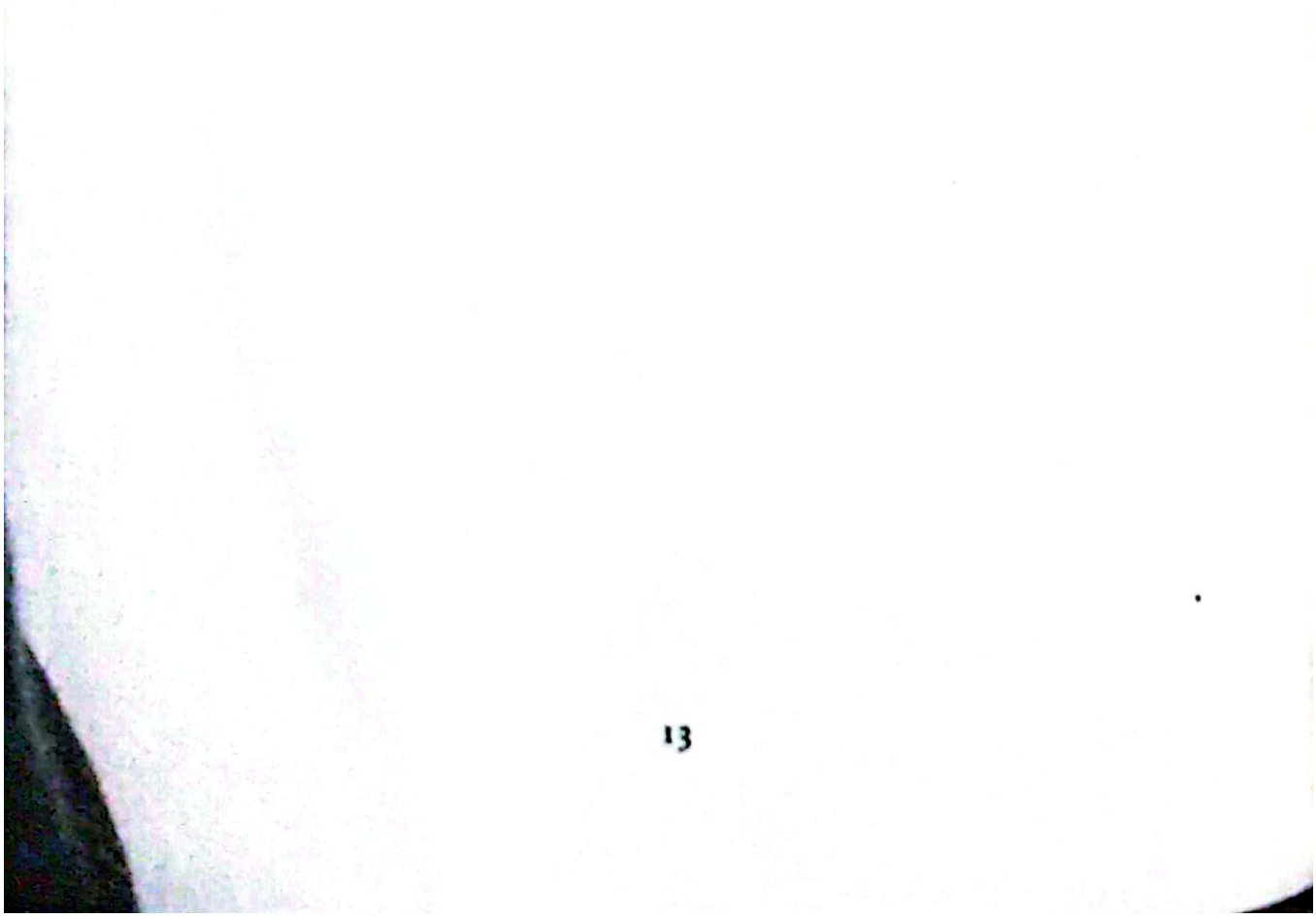
だが

私は水に書く詩人である
私は水に愛を書く

たとえ
水に書いた詩が消えてしまっても

CamScannerでスキャン

海に来るたびに
愛を思い出せるように



CamScannerでスキャン

星を数え飽きたら

ひとを一人
だますたびに
空に星が
ひとつずつ増えると
女に
教えた男は
船出して行って
そのまま
帰って来なかった

女は
窓辺で星の数を数えながら

CamScannerでスキャン

男を待って
一人さみしく
年老いていった

女は
私の母
男は
私の父
私の心は
天文学でした

CamScannerでスキャン

さすらいの途上だったら

荒磯暗く啼くかもめ
われは天涯　家なき子
ひとり旅ゆえ口ずさむ
兄のおしえてくれし歌
さよならだけが人生だ

流るる雲を眺めゆかば
たどりつかんか　冥界に
ひとを愛するさびしさは
ただ一茎のひなげしや
さよならだけが人生だ

CamScannerでスキャン

つばくらからす　鵙つぐみ
鳥も天涯　家なき子
草むら遠く灯をともす
ひとのしあわせ過ぎゆきて
さよならだけが人生だ

CamScannerでスキャン

もしも住む家がなかったら

おとうとよ
人生は
汽車に似ているね
さみしくなると
汽笛をならす

おとうとよ
人生は
汽車に似ているね
さすらいながら
年老いてゆく

CamScannerでスキャン

ああ　おとうとよ
おとうとよ
だけども旅はすてきだよ
荒野(こうや)に
野菊(のぎく)も咲いてるし
見知らぬひとが手を振るし

おとうとよ
人生は
汽車に似ているね
　ひとの心に
　ときどき停(と)まる

おとうとよ
人生は
汽車に似ているね

CamScannerでスキャン

いつか故郷（こきょう）に
帰ってくるんだ

CamScannerでスキャン

恋人に歌ってあげたかったら

引き算の問題ですよ
十から一羽の駒鳥を引くのです
九から一本の酒壜を引くのです
八から忘れものの帽子を引くのです
七から一夜の忘却を引くのです
六から一台の手押車を引くのです
五から一望の青い海の眺めを引くのです
四から一冊のジャムの詩集を引くのです
三から一人の恋仇を引くのです
二からは何も引くことはない
一からは何も引くことはない
二人で旅をつづけてゆこう
それがぼくらの恋の唄

CamScannerでスキャン

幸福が遠すぎたら

さよならだけが
人生ならば
　また来る春は何だろう
　はるかなはるかな地の果てに
　咲いてる野の百合（ゆり）何だろう

さよならだけが
人生ならば
　めぐりあう日は何だろう
　やさしいやさしい夕焼（ゆうやけ）と
　ふたりの愛は何だろう

CamScannerでスキャン

さよならだけが
人生ならば
建てたわが家は何だろう
さみしいさみしい平原に
ともす灯りは何だろう

さよならだけが
人生ならば
人生なんか　いりません

CamScannerでスキャン

「ヤザーン・ゲーム」より

CamScannerでスキャン

メリーさんの　羊は　雪より白い
メリーさんの　羊は　どこでもついてく

メリーさんの　羊は　学校へついてく
先生たちは　大さわぎ
規則違反だ　追いかえせ！

メリーさんの　羊は　学校の門で
メリーさんくるのを　待っている

「なぞなぞ　なあに？
なぞなぞ　なあに？」

羊はどうして　メリーさんを好きなの？
羊はどうして　メリーさんを好きなの？

CamScannerでスキャン

「こたえは　かんたん」

メリーさんが　羊を好きだから！

＊

ポケットにライ麦(むぎ)いれて
知らんふりして
六ペンスの唄(うた)をうたえば
二十四羽のくろつぐみが
パイにやかれる

パイをあけたら
まっくろこげのくろつぐみが
声をそろえてうたいだす
王さま！

CamScannerでスキャン

ごちそういかが？

王さまはおくらのなかで
一日いっぱい　お金かぞえる
おきさきはベッドで
はちみつパンを　もぐもぐたべてる

女中は庭で
洗濯物ほしてる
そこへつぐみがとんできて
パチン！　と
鼻をついばんだ

どうしよう　と
男の子が言った
女の子に言った

わからない
わからない　と
女の子が言った
男の子に言った

ふたりはキスをしたいのに
ふたりはキスをしたいのに

＊

てんと虫（むし）
てんと虫

CamScannerでスキャン

すぐとんでかえれ
おまえの家が火事だ
子供がみんな焼け死んだ

あとにのこった
かわいいアンが
お鍋の下に
かくれてる

＊

まき毛のまき毛の
マリーちゃん
ぼくのお嫁にきておくれ

CamScannerでスキャン

お皿洗いはさせないし
豚のせんたくさせないよ
あかい苺におさとうと
ミルクをたっぷりかけて食べ
あさから晩まで　ぶーら　ぶら
あさから晩まで　ぶーら　ぶら

*

ロンドン橋が　落っこちた
さあどうしよう　どうしよう
ロンドン橋が　落っこちた
美しいお嬢さん！

粘土と木とを　かきあつめ
ロンドン橋を　つくろうよ

CamScannerでスキャン

おんなじ橋を　つくろうよ
美しいお嬢さん！

粘土と木では　流される
ロンドン橋が　流される
それではそれでは　どうしよう
美しいお嬢さん！

煉瓦（れんが）と石とを　つみあげて
ロンドン橋を　つくろうよ
おんなじ橋を　つくろうよ
美しいお嬢さん！

煉瓦と石では　くずれます
ロンドン橋が　くずれます
それではそれでは　どうしよう

CamScannerでスキャン

美しいお嬢さん！

金と銀とを　くみたてて
ロンドン橋を　つくろうよ
おんなじ橋を　つくろうよ
美しいお嬢さん！

金と銀では　ぬすまれる
ロンドン橋が　ぬすまれる
それではそれでは　どうしよう
だれか見張(みは)りを　たてようか
夜から朝まで腕組(うでぐ)んで
ロンドン橋を　守るため
美しいお嬢さん！

もしも見張りが　眠ったら

CamScannerでスキャン

ロンドン橋が　落ちる
あなたもいっしょに　落ちる
美しいお嬢さん！
あついコーヒー
一杯いかが、

＊

ハンプティ・ダンプティ　塀にすわって
ハンプティ・ダンプティ　転がりおちた

王様の馬と王様の家来
ぜんぶはしって　みても

ハンプティ・ダンプティを

＊

ひとりものの婆（ばあ）さん
市場に卵を売りにいき
いつのまにやら
いねむりこっくり

そこへ商人がやってきて
婆さんのスカートを
ハサミでジョキジョキ
おまけにペティコートまで

ハサミでジョキジョキ
冷（ひ）え症（しょう）の婆さん
歯をカチカチならして

CamScannerでスキャン

目をさました

カタカタふるえて
見まわして
「おお　どうしたことか
こりゃあたしじゃない！」

「もしも　あたしなら
うちの仔犬（こいぬ）がしっぽをふるし
ちがっていたら
ワン　ワン吠（ほ）える」

そこで婆さん
帰ってくると
まっくらやみから出てきた仔犬
婆さん見つけて

CamScannerでスキャン

ワン　ワン吠えた

ひとりものの婆さん
はだかで泣いた
「やっぱりあたしは
あたしじゃない
それじゃあたしは
だれだろう？」

CamScannerでスキャン

『われに五月を』より

CamScannerでスキャン

五月の詩

きらめく季節に
たれがあの帆を歌ったか
つかのまの僕に
過ぎてゆく時よ

夏休みよ　さようなら
僕の少年よ　さようなら
ひとりの空ではひとつの季節だけが必要だったのだ　重たい本　すこし
雲雀の血のにじんだそれらの歳月たち
萌ゆる雑木は僕のなかにむせんだ
僕は知る　風のひかりのなかで

CamScannerでスキャン

僕はもう花ばなを歌わないだろう
僕はもう小鳥やランプを歌わないだろう
春の水を祖国とよんで　旅立った友らのことを
そうして僕が知らない僕の新しい血について
僕は林で考えるだろう
木苺よ　寮よ　傷をもたない僕の青春よ
さようなら

きらめく季節に
たれがあの帆を歌ったか
つかのまの僕に
過ぎてゆく時よ

二十才　僕は五月に誕生した
僕は木の葉をふみ若い樹木たちをよんでみる
いまこそ時　僕は僕の季節の入口で

CamScannerでスキャン

はにかみながら鳥たちへ
手をあげてみる
二十才　僕は五月に誕生した

CamScannerでスキャン

少女に

たれでもその歌をうたえる
それは五月のうた
ぼくも知らない　ぼくたちの
新しい光の季節のうた

郵便夫は愛について語らない
花ばなを読み
ぼくの青春は　気まぐれな
雲の時を追いかけていたものだ

ああ　ぼくの内を一つの世界が駈け去ってゆき

CamScannerでスキャン

見えないすべてのなかから
ぼくの選択できた唯一のもの　少女よ

ぼくはかぎりなく
おまえをつきはなす
かぎりなくおまえを抱きしめるために

ぼくが小鳥に

ぼくが小鳥になれば
あらゆる明日はやさしくなる
食卓では　見えないが
調和がランプのようにあかるい
朝　配達夫は花圃を忘れる
歳月を忘れ

CamScannerでスキャン

少女は時を見捨(みす)て
ぼくには　空が青いばかり

そこに世界はあるだろう
新しいすべての名前たちもあるだろう
だがしかし　名前の外側では無窮(むきゅう)の不幸もあるだろう

小鳥となるな
すくなくとも　ぼくはなるな
手で触(ふ)れてみない明日のためには

桜の実のうれる頃(ころ)

もうない君の青春は　たとえば
君の知らない帆(ほ)の上に

CamScannerでスキャン

歳月のうっすらした埃りをあびて
ぶらさがる

桜の実の熟れるころ
君が歌をやめたのは　祖国のため
君があの家を妻に見捨てたのは　祖国のため
死んでしまったのは　祖国のため

だが　祖国とは何だ
地平に立って
僕は知る　君のやましさだけを

花はなをみうまごころ　ほくたちら
やましさだけがもつ強さのため
たったひとつの　確かなのため

少女詩集

CamScannerでスキャン

汽車

ぼくの詩のなかを
いつも汽車がはしってゆく

その汽車には　たぶん
おまえが乗っているのだろう

でも
ぼくにはその汽車に乗ることができない

かなしみは
いつも外から
見送っていたい

CamScannerでスキャン

てがみ

つきよのうみに
いちまいの
てがみをながして
やりました

つきのひかりに
てらされて
てがみはあおく
なるでしょう

ひとがさかなと
よぶものは

CamScannerでスキャン

みんなだれかの
てがみです

CamScannerでスキャン

見えない花のソネット

そこに
見えない花が咲いている
教えてあげよう
ぼくの足もとだ

数えてみると
花びらは四枚　色は薄いオレンジ
花ことばは知らないけれど
いつも風にゆれている

そこに
見えない花が咲いている

CamScannerでスキャン

ぼくにだけしか見えない花が咲いている

だから

あしたもまた

ぼくはいつでも帰ってくる

CamScannerでスキャン

子猫

子猫がいねむりしてるまに
ぼくははじめての煙草をおぼえた

子猫がいねむりをしてるまに
ぼくははじめて恋をした

子猫がいねむりをしてるまに
ぼくはみじかい旅行をした

子猫がいねむりをしてるまに
ぼくは別れのにがさを知った

CamScannerでスキャン

子猫がいねむりしてるまに
ああ
地球がまわる　地球がまわる

CamScannerでスキャン

しみのあるラプソディー

大山デブコと写真を撮った
とびきり大きな鷲鳥と二重唱した
カリカリ博士と体重をはかり
足の悪い少女とプールで泳いだ
いつでも
ぼくのほうがちょっとばかり
かっこよかった
ぼくは桜んぼを食べながら
プールサイドで
哲学した
かなしみというしみは　どんなしみ？

CamScannerでスキャン

時は過ぎゆく

わたしが見た　と
ひばりが言った
私はおどろいて青い地平を見つめたが
時が何であったか
見ることはできなかった

わたしが聞いた　と
青麦(あおむぎ)たちが言った
のどかな故郷(こきょう)の畦道(あぜみち)に立止(たちど)まり　私は耳をすましたが
時が何であったか
聞くことはできなかった

CamScannerでスキャン

わたしが触れた　と
少年が言った
川のほとりではずかしそうに　二人は黙ってしまったが
時が何であったか
感じることはできなかった

私は
いつでも途方にくれている
地平線はすでに
大人である

CamScannerでスキャン

あなたに

書物のなかに海がある
心はいつも航海をゆるされる

書物のなかに草原がある
心はいつも旅情をたしかめる

書物のなかに町がある
心はいつも出会いを待っている

人生はしばしば
書物の外ですばらしいひびきを
たてて

CamScannerでスキャン

くずれるだろう

だがもう一度
やり直すために
書物のなかの家路を帰る

書物は
家なき子の家

CamScannerでスキャン

けむり

ことばで
一羽の鷗を
撃ち落とすことができるか

ことばで
沈む日を
思いとどまらせることができるか

ことばで
バルセロナ行の旅客船を
増発できるか

CamScannerでスキャン

ことばで
人生がはじまったばかりの少女の薄い肩を
つかむことができるか

私は
かなしくなると
けむりを見ている

CamScannerでスキャン

種子

きみは
荒れはてた土地にでも
種子をまくことができるか？

きみは
花の咲かない故郷の渚にでも
種子をまくことができるか？

きみは
流れる水のなかにでも
種子をまくことができるか？

CamScannerでスキャン

たとえ
世界の終りが明日だとしても
種子をまくことができるか？

恋人(こいびと)よ
種子はわが愛

CamScannerでスキャン

短歌

CamScannerでスキャン

燃ゆる頬抄

森駈けてきてほてりたるわが頬をうずめんとするに紫陽花くらし

わが通る果樹園の小屋いつも暗く父と呼びたき番人が棲む

CamScannerでスキャン

海を知らぬ少女の前に麦藁帽のわれは両手をひろげていたり

わが鼻を照らす高さに兵たりし亡父の流灯かかげてゆけり

そら豆の殻一せいに鳴る夕母につながるわれのソネット

草の笛吹くを切なく聞きており告白以前の愛とは何ぞ

ペタル踏んで花大根の畑の道同人雑誌を配りにゆかん

ころがりしカンカン帽を追うごとくふるさとの道駈けて帰らん

知恵のみがもたらせる詩を書きためて暖かきかな林檎の空箱

CamScannerでスキャン

ふるさとにわれを拒(こば)まんものなきはむしろさみしく桜の実照る

雲雀(ひばり)の血すこしにじみしわがシャツに時経(へ)てもなおさみしき凱歌(がいか)

ラグビーの頬傷(ほおきず)は野で癒(い)ゆるべし自由をすでに怖(お)じぬわれらに

わが夏をあこがれのみが駈(か)け去れり麦藁帽子(むぎわらぼうし)被(かぶ)りて眠る

亡(な)き父にかくて似(に)てゆくわれならんか燕来(つばめ)る日も髭剃(ひげそ)りながら

記憶する生　抄

CamScannerでスキャン

胸病めばわが谷緑ふかからんスケッチブック閉じて眠れと

ドンコザックの合唱は花ふるごとし鍬はしずかに大きく振らん

季節が僕を連れ去ったあとに　抄

失いし言葉かえさん青空のつめたき小鳥撃ちおとすごと

帆やランプ小鳥それらの滅びたる月日が貧しきわれを生かしむ

空のない窓が記憶のなかにありて小鳥とすぎし日のみ恋おしむ

CamScannerでスキャン

駈けてきてふいにとまればわれをこえてゆく風たちの時を呼ぶこえ

夏美の歌 抄

君のため一つの声とわれならん失いし日を歌わんために

空のない窓が夏美のなかにあり小鳥のごとくわれを飛ばしむ

藁の匂いのする黒髪に頬よせてわれら眠らん山羊寝しあとに

青空より破片あつめてきしごとき愛語を言えりわれに抱かれて

CamScannerでスキャン

死者たちのソネットならん空のため一本の樹の髪そよげるは

一本の樫の木やさしそのなかに血は立ったまま眠れるものを

青空はわがアルコールあおむけにわが選ぶ日日わが捨てる夢

空は本それをめくらんためにのみ雲雀もにがき心を通る

飛べぬゆえいつも両手をひろげ眠る自転車修理工の少年

CamScannerでスキャン

一粒の向日葵の種まきしのみに荒野をわれの処女地と呼びき

桃いれし籠に頬髭おしつけてチエホフの日の電車に揺らる

チエホフ祭のビラのはられし林檎の木かすかに揺るる汽車過ぐるたび

CamScannerでスキャン

莨火を床に踏み消して立ちあがるチエホフ祭の若き俳優

日あたりて貧しきドアぞこつこつと復活祭の卵を打つは

包みくれし古き戦争映画のビラにあまりて鯖の頭が青し

父の遺産のなかに数えん夕焼はさむざむとどの畦よりも見ゆ

外套のままのひる寝にあらわれて父よりほかの霊と思えず

冬の斧たてかけてある壁にさし陽は強まれり家継ぐべしや

さむきわが望遠鏡がとらえたる鳶遠ければかすかなる飢え

CamScannerでスキャン

硝煙を嗅ぎつつ帰るむなしさにさむき青空撃ちたるあとは

父葬りてひとり帰れりびしょ濡れのわれの帽子と雨の雲雀と

赤き肉吊せし冬のガラス戸に葬列の一人としてわれうつる

外套の酔いて革命誓いてし人の名知らず海霧ふかし

頬つけて玻璃戸にさむき空ばかり一羽の鷹をもし見失わば

旗となるわが明日なれよ芽ぐむ木にかがみて靴をみがきいるとも

ひとり酔えば軍歌も悲歌にかぞうべし断崖に町の灯らよろめきて

CamScannerでスキャン

地下道のひかりあつめて浮浪児が帽子につつみ来し小雀よ

浮浪児が大根抜きし穴ならむ明るくふかく陽があつまれる

跳躍の選手高飛ぶつかのまを炎天の影いきなりさみし

目つむりて春の雪崩をききいしがやがてふたたび墓掘りはじむ

混血の子ゆえ勝ちてもさみしさに穂草の熱き茎噛みてゆく

サ・セ・パリも悲歌にかぞえん酔いどれの少年と一つのマントのなかに

ねむりてもわが内に棲む森番の少年と古きレコード一枚

CamScannerでスキャン

マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや

すこし血のにじみし壁のアジア地図もわれらも揺らる汽車通るたび

冬蠅のとまる足うら向けて眠るたやすく革命信ぜし男

復員服の飴屋が通る頃ならんふくらみながら豆煮えはじむ

階段の掃除終えきし少年に河は語れり　遠きアメリカ

地下水道をいま通りゆく暗き水のなかにまきれて叫ぶ種子あり

きみのいる刑務所の塀に自転車を横向きにしてすこし憩えり

麻薬中毒重婚浮浪不法所持サイコロ賭博われのブルース

五円玉のブルースもあれ陽あたりの空罐の傷足で撫でつつ

黒人に生れざるゆえあこがれき野生の汽罐車、オリーブ、河など

壁越しのブルースは訛りつよけれど洗面器に湯をそそぎつつ和す

老犬の血のなかにさえアフリカは目ざめつつありおはよう、母よ

大声で叫ぶ名が欲し地下鉄の壁に触れきしシャツ汚れつつ

狂熱の踊りはならず祖父の死後帰郷して大麦入りのスープ

CamScannerでスキャン

アスファルトにめりこみし大きな靴型よ鉄道死して父亡きあとも

死ぬならば真夏の波止場あおむけにわが血怒濤となりゆく空に

セールスマンの父と背広を買いにきてややためらいて鷗見ており

運転手移民刑務所皿洗い鉄道人夫われらの理由

さむき川をセールスマンの父泳ぐその頭いつまでも潜ることなし

牛乳を匙ですくいて飲み病めば船は遠くを出てゆきにけり

すでに亡き父への葉書一枚もち冬田を越えて来し郵便夫

CamScannerでスキャン

悪霊となりたる父の来ん夜か馬鈴薯くさりつつ芽ぐむ冬

なまぐさき血縁絶たん日あたりにさかさに立ててある冬の斧

さかさまに吊りしズボンが曇天の襞きざみおりわれの老年

北の壁に一枚の肖像かけており彼の血をみな頒ちつつ老ゆ

わが内に越境者一人育てつつ鍋洗いおり冬田に向きて

橋桁にぶつかる夜の濁流よわが誕生は誰に待たれし

冬海に横向きにあるオートバイ母よりちかき人ふいに欲し

CamScannerでスキャン

林檎の木伐り倒し家建てるべしきみの地平をつくらんために

きみが歌うクロッカスの歌も新しき家具の一つに数えんとする

歌ひとつ覚えるたびに星ひとつ熟れて灯れるわが空をもつ

乾葡萄喉より舌へかみもとし父となりたしあるときふいに

夾竹桃咲きて校舎に暗さあり饐舌の母をひそかににくむ

けたたましくピアノ鳴るなり滅びゆく邸の玻璃戸に空澄みながら

鯣雲なだれてくらき校廊にわれが瞞せし女教師が待つ

CamScannerでスキャン

うしろ手に墜ちし雲雀をにぎりしめ君のピアノを窓より覗く

胸病むゆえ真赤な夏の花を好く母にやさしく欺されていし

わが知れるのみにて春の土ふかく林檎の種子はわが愛に似る

わが撃ちし鳥は拾わで帰るなりもはや飛ばざるものは妬まぬ

うしろ手に春の嵐のドアとざし青年は已にけだものくさき

剝製の鷹ひっそりと冷えている夜なりひとり海見にゆかん

一つかみほど苜蓿うつる水青年の胸は縦に拭くべし

CamScannerでスキャン

地下街の人口ふかく入りゆきし嬰よ海暮のわれ脱けゆきて

暗き夜の階段に花粉こぼしつつわが待ちており母の着替えを

御殿山にまきれてつきし母の指紋しずかにはぐれゆく夜ならん

風風の眼の青空へ喉向けて刺られつつあり人党直後

わが内を脱けしきみしき少年に冬の動物園まで逢いにゆく

CamScannerでスキャン

第三歌集『田園に死す』抄

大工町寺町米町仏町老母買ふ町あらずやつばめよ

新しき仏壇買ひに行きしまま行方不明のおとうととと鳥

売りにゆく柱時計がふいに鳴る横抱きにして枯野ゆくとき

CamScannerでスキャン

開かれしゆえに一生大事する学校地獄のおそうとの椅子

町の遠さを帯の長さではかるなり呉服屋地獄より嫁ぎきて

生命線ひそかに変へむためにわが抽出しにある　一本の釘

たつた一つの嫁入道具の仏壇を義眼のうつるまで磨くなり

中古の参買いにゆく母のため長子は学びをり　法医学

ほどかれて少女の髪にむすばれし葬儀の花のことばかな

川に逝らひ映く曼珠沙華赤ければそつに地獄へ行きたし今日も

CamScannerでスキャン

売られたる夜の冬田へ一人来て埋めゆく母の真赤な櫛を

亡き母の真赤な櫛で梳きやれば山鳩の羽毛抜けやまぬなり

亡き母の位牌の裏のわが指紋さみしくほぐれゆく夜ならむ

村境の春や錆びたる捨て車輪ふるさとまとめて花いちもんめ

濁流に捨て来し燃ゆる曼珠沙華あかきを何の生贄とせむ

見るために両瞼をふかく裂かむとす剃刀の刃に地平をうつし

織られて村を出てゆくものが見ゆ鶏の血いろにスカーフを巻き

CamScannerでスキャン

白髪を洗ふしづかな音すなり葭切やみし夜の沼より

かくれんぼの鬼とかれざるまま老いて誰をさがしにくる村祭

ひとに売る自伝を持たぬ男らにおでん屋地獄の鬼火が燃ゆる

老父ひとり泳ぎをはりし秋の海にわれの家系の脂泛きしや

亡き父の歯刷子一つ捨てにゆき断崖の青しばらく見つむ

吸ひさしの煙草で北を指すときの北暗ければ望郷ならず

とんびの子なけよとやまのかねたたき姥捨以前の母眠らしむ

CamScannerでスキャン

降りながらみづから亡ぶ雪のなか祖父の瞠し神をわが見ず

情死ありし川の瀬音をききながら毛深き桃を剝き終るなり

おとうとの義肢作らむと伐りて来しどの桜木も桜のにほひ

少年の日はかの森のゆふぐれに赤面恐怖の木を抱きにゆく

はこべらはいまだに母を避けながらわが合掌の暗闇に咲く

鶏頭の首なしの茎流したる川こそ渡れわが地獄変

CamScannerでスキャン

女優にもなれざりしかば冬沼にかもめ撃たるる音聴きてをり

テーブルの上の荒野をさむざむと見下すのみの劇の再会

稽古場の夜の片隅ひと知れず埋めてしまひしチエホフのかもめ

CamScannerでスキャン

町裏で一番さきに灯ともすはダンス教室わが叔父は　癌

アスピリンの空箱裏に書きためて人生処方詩集と謂ふか

撞球台の球のふれあふ荒野までわれを追ひつめし　裸電球

白球が逃亡の赤とらへたる一メートルの旅路の終り

舐めて癒すボクサーの傷わかき傷羨みゆけば深夜の市電

冬の犬コンクリートににじみたる血を舐めてをり陽を浴びながら

冷蔵庫のなかのくらやみ一片の肉冷やしつつ読むトロツキー

CamScannerでスキャン

〈サンドバッグをわが叩くとき町中の不幸な青年よ　目を醒ませ〉

人生はただ一問の質問にすぎぬと書けば二月のかもめ

わけもなく剃刀ときてゐる夜の畳を猫が過ぎてゆくなり

終電車がわれのブルース湯にひたす腿がしだいに熱くなる愛

死の重さ長さスコップもて量れり地平をかわきとぶ冬の雲

「革命だ、みんな起きろ」といふ声す壁のにんじん種子袋より

夾竹桃の花のくらやみ背にしつつ戦後の墓に父の戒名

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

われに五月を 抄

葱坊主どこをふり向きても故郷

詩も非力かげろう立たす屋根の石

CamScannerでスキャン

ひぐらしの道のなかばに母と逢う

わが金枝篇抄

舟虫は桶ごと乾けり母恋し

五月の雲のみ仰げり吹けば飛ぶ男

訛り強き父の高唱ひばりの天

CamScannerでスキャン

わが高校時代の犯罪 抄

心中を見にゆく髪に椿挿し

どくだみや畳一枚あれば死ねる

＊

病む妹のこゝろ旅行く絵双六

小春日や病む子も居たる手毬唄

CamScannerでスキャン

青空がぐんぐんと引く凧の糸

夕立に家の恋しい雀かな

生命線を透かせば西日病室に

浮寝鳥人夫は吸殻かるく捨つ

シベリアも正月ならむ父恋し

ちゝはゝの墓寄りそひぬ合歓のなか

妻踏みの背を押す風よ父あらば

CamScannerでスキャン

母来るべし鉄路の菫咲くまでには

初蝶ぬけし書店の暗きに入る

馬車の子のねむき家路に春の雷

もし汽車が来ねば夏山ばかりの駅

村の子みんな唱歌が好きで蝸牛

夕焼に父の帆なほも沖にあり

右車窓に海がとまりて秋の蝶

CamScannerでスキャン

魔飛へり父の遺業を掃ぐること

梨花白し叔母は一生三枚目

ユダ恋ふてなぐさむ男月見草

CamScannerでスキャン

第一句集『花粉航海』抄

ラグビーの頬傷ほてる海見ては

チエホフ忌頬髭おしつけ籠桃抱き

十五歳抱かれて花粉吹き散らす

CamScannerでスキャン

父を嗅ぐ書斎に犀を幻想し

影墜ちて雲雀はあがる詩人の死

色鉛筆を失くしたる子や秋まつり

夏井戸や故郷の少女は海知らず

癌すすむ父や銅版画の寺院

されど逢びき海べの雪に頬搏たせ

暗室より水の音する母の情事

CamScannerでスキャン

鍵穴に蜜ぬりながら息あらし

沈む陽に顔かくされて秋の人

テレビに映る無人飛行機父なき冬

亡き父にとゞく葉書や西行忌

花売車どこへ押せども母貧し

青む林檎水兵帽に髪あまる

わが夏帽どこまで転べども故郷

CamScannerでスキャン

秋風やひとさし指は誰の墓

蛍来てともす手相の迷路かな

家負うて家に墜ち来ぬ蝸牛

かくれんぼ三つかぞえて冬となる

母の蛍捨てにゆく顔照らされて

秋まつり子消し人形川に捨て

黒人悲歌桶にぽつかり籾殻浮き

CamScannerでスキャン

書物の起源冬のてのひら閉じひらき

枯野ゆく棺のわれふと目覚めずや

たんぽぽは地の糧詩人は不遇でよし

方言かなし菫に語り及ぶとき

胸痛きまで鉄棒に凭り鰯雲

雁渡るあやとりの梯子は消え

蛍火で読みしは戸籍抄本のみ

CamScannerでスキャン

ランボーを五行とびこす恋猫や

わが死後を書けばかならず春怒濤

眼帯に死蝶かくして山河越ゆ

汽車が過ぎ秋の魔が過ぐ空家かな

犬の屍を犬がはこびてクリスマス

父へ千里水の中なる脱穀機

詩人死して舞台は閉じぬ冬の鼻

CamScannerでスキャン

暗き蜜少年は扉の影で待つ

木の葉髪日あたるところにて逢わむ

老いたしや書物の褥に船沈む

法医学・桜・暗黒・父・自瀆

少年のたてがみそよぐ銀河の櫓

月蝕待つみずから遺失物となり

CamScannerでスキャン

この他の著書

幸福についての七つの詩

1

幸福という名の家具(かぐ)は
どこに置いたらいいのでしょうか？

小さな古いスプーンのように
戸棚(とだな)の隅(すみ)にしまってしまうわけにも
いかないし
電気冷蔵庫のように
台所の奥に片付けてしまうわけにも
いかないし……
（第一　私は
幸福という名の家具の
掃除(そうじ)の仕方も知らないのです）

CamScannerでスキャン

2

幸福の重さについて
考えてみたことがありますか？
たとえ二羽の小鳥ぐらいの
ささやかな幸福にでも
それなりの重さがあるのだということを

だから　どうか
悲しむのは止めてください
（人生が幸福より重すぎたって
それはあたりまえのことなのです）

3

二人で同じ桜んぼを食べることはできる
二人で同じモーツァルトを聴くこともできる

CamScannerでスキャン

二人で同じホテルで海を見たあとで
二人で同じベッドに眠ることもできる

だが　なぜだろう
二人で同じ夢を見ることはできない

(同じ幸福がふたつないとは
なんという　神の吝(けち)!)

4

あなたが
あたらしい歌をひとつ覚えるたびに
どこかで誰かが
木の匙(さじ)やお友だちを
失(な)くすとしたら?

CamScannerでスキャン

あなたが
もし幸福を手に入れたら
どこかで誰かが
病気になるとしたら？

それでもあなたは
私を愛すと言いますか？

5

幸福を買いにゆくのに
買物籠（かご）なんかいりませんよ
幸福は
素手（すで）で持ってくるにかぎる！

6

ポケットを探したってだめです

CamScannerでスキャン

空を見上げたって
涙ぐんで手紙を書いたって
だめです

郵便局に日曜日があるように
幸福にだって休暇があるのですから

7

幸福の話をすることのできるのは
幸福な人ばかりです
あの一匹の
年とった犬に幸福のことを聞いてごらんなさい

たぶん　ほら
黙って向こうへ行ってしまうでしょう

CamScannerでスキャン

一本の樹にも
流れている血がある
樹の中では血は立ったまま眠っている

*

どんな鳥だって
想像力より高く飛ぶことはできない
だろう

*

世界が眠ると
言葉が目をさます

CamScannerでスキャン

*

大鳥の来る日　水がにごる
大鳥の来る日　書物が閉じられる
大鳥の来る日　トロツキーは死ぬ
大鳥の来る日　汽車は連結する

大鳥の来る日　ひとは私を見るだろう

*

一八九五年の六月のある晴れた日に
二十一歳の学生グリエルモ・マルコニが
父親の別荘の庭ではじめて送信した
無線のモールス信号が
今　わたしにとどいた

CamScannerでスキャン

ここへ来るまでにとれだけ多くの死んだ世界をくぐりぬけてきたことだろう

わたしは返信を打つために郵便局まできたが　忘れものしたように不意にかなしくなった

＊

書くことは速度でしかなかった
追い抜かれたものだけが紙の上に存在した

読むことは悔誤でしかなかった
王国はまだまだ遠いのだ

＊

今日の世界は演劇によって再現できるか

CamScannerでスキャン

今日の演劇は世界によって再現できるか

今日の再現は世界によって演劇できるか

＊

「そうそう　中学生の頃、公園でトカゲの子を拾ってきたことがあった。コカコーラの壜に入れて育てていたら、だんだん大きくなって出られなくなっちまった。コカコーラの壜の中のトカゲ、コカコーラの壜の中のトカゲ　おまえにゃ壜を割って出てくる力なんかあるまい　日本問題にゃおさらばだ　歴史なんて所詮は作詞化された世界にしかすぎないのだ！　恨んでも恨んでも恨みたりないのだよ、祖国ということばよ！『大事件は二度あらわれる』とマルクスは言った　一度目は悲劇として、二度目は喜劇としてだ！　だが真相はこうだ！　一度目は事件として、二度目は言語として、だ！　ブリュメールの十八日は言語だ！　連合赤軍も言語だ！　俺自身の死だって言語化されてしまうのを拒むことが出来ないのだよ！　ああ　喜劇！」

CamScannerでスキャン

*

まだ一度も作られたことのない国家をめざす
まだ一度も想像されたことのない武器を持つ
まだ一度も話されたことのない言語で戦略する
まだ一度も記述されたことのない歴史と出会う

たとえ
約束の場所で出会うための最後の橋が焼け落ちたとしても

CamScannerでスキャン

愛について

夜更(よふ)け
二階のどこかを　おまえが歩く
その足音が　こだまする
ぼくはその下で
本を読んでいる
戸外(おもて)は風が吹いている
もうすぐ　秋がくるだろう

夜更け
二階のどこかを　おまえが歩く
その足音が　こだまする
ぼくは本を閉じる

CamScannerでスキャン

家のなかで
ただ意味もなく足音が
二人を　ひびきあわせている

CamScannerでスキャン

飛行機よ

翼が鳥をつくったのではない
鳥が翼をつくったのである

少年は考える
言葉で自分の翼をつくることを
だが
大空はあまりにも広く
言葉はあまりにもみすぼらしい

少年は考える
想像力で自分の翼をつくることを
いちばん小さな雲に腰かけて

CamScannerでスキャン

うすよごれた地上を見下ろすと
ため息ばかり

少年は考える
リリエンタールの人力飛行機
両手をひろげてのぼったビルディングの屋上に
忘却の薄暮がおしよせる
せめて
墜落ならばできるのだ
翼がなくても墜ちられるから

ああ
飛行機
飛行機
ぼくが
世界でいちばん

CamScannerでスキャン

孤独な日に
おまえはゆったりと
夢の重さと釣合いながら
空に浮かんでいる

CamScannerでスキャン

あなたへの手紙

あて名のない手紙を書いたことがあります
それを郵便ポストに入れずに
楡の木の穴に入れたことがあります
まだ逢ったことのない女の子への手紙でした
愛の手紙でした
ところが　その手紙に返事がきたのです
お手紙ありがとう
愛の手紙に　愛の手紙で
お返事できるのがとてもしあわせです
この返事も
ほんとはぼくが自分で書いたものです
ぼくが今より若く　まだ人生の苦渋を知らなかったころ
空はいつも真青だった

CamScannerでスキャン

わが谷は緑なりき

時には思い出してみても
いいのではなかろうか
都会の片隅のアパートの壁に貼られた
一枚の草原の写真のことを

時には思い出してみても
いいのではなかろうか
人が故郷へ帰りたくなるように
馬もまた望郷の思い出に駈られることを

CamScannerでスキャン

時には思い出してみても
いいのではなかろうか

都会の雑踏から遠くはなれて
馬たちが生き生きと走るすがたを

地方競馬は　故郷の競馬
そこには生きる馬と人の原点がある

人目はあたらなくとも陽はあたる
わたしたちが

何度でも帰ってゆくことのできる
人生の憩いの場所だ

CamScannerでスキャン

世界の一ばん遠い土地へ

一本の樹(き)は
歴史ではなくて
思い出である

一羽の鳥は
記憶ではなくて
愛である

一人の誕生(たんじょう)は
経験ではなくて
物語である

CamScannerでスキャン

私は
それらのあいだを旅しながら
大人(おとな)になって
ゆくのだろう

CamScannerでスキャン

かなしくなったときは

かなしくなったときは
海を見にゆく

古本屋（ふるほんや）のかえりも
海を見にゆく

あなたが病気なら
海を見にゆく

こころ貧（まず）しい朝も
海を見にゆく

CamScannerでスキャン

ああ　海よ
大きな肩とひろい胸よ

おまえはもっとかなしい
おまえのかなしみに
わたしの生活は
洗われる

どんなつらい朝も
どんなむごい夜も
いつかは終る

人生はいつか終るが
海だけは終らないのだ

かなしくなったときは

CamScannerでスキャン

海を見にゆく

ひとりぼっちの夜も

海を見にゆく

CamScannerでスキャン

懐かしのわが家

昭和十年十二月十日に
ぼくは不完全な死体として生まれ
何十年かかゝって
完全な死体となるのである
そのときが来たら
ぼくは思いあたるだろう
青森市浦町字橋本の
小さな陽あたりのいゝ家の庭で
外に向って育ちすぎた桜の木が
内部から成長をはじめるときが来たことを

子供の頃、ぼくは

CamScannerでスキャン

汽車の口真似が上手かった
ぼくは
世界の涯てが
自分自身の夢のなかにしかないことを
知っていたのだ

CamScannerでスキャン

ふしあわせと言う名の猫

ふしあわせと言う名の猫
がいる
いつもわたしのそばに
ぴったり寄りそっている

ふしあわせと言う名の猫
がいる
だからわたしはいつも
ひとりぼっちじゃない

このつぎ春が
来たなら

CamScannerでスキャン

むかえに来ると
言った
あのひとの嘘(うそ)つき
もう春なんか
来やしない

ふしあわせと言う名の猫
がいる
いつもわたしのそばに
ぴったり寄りそっている

CamScannerでスキャン

裏窓（うらまど）

裏窓（うらまど）からは
夕陽（ゆうひ）が見える
洗濯干場（せんたくほしば）の梯子（はしご）が見える
裏窓からは
寄りそってるふたりが見える

裏窓からは
川が見える
暗いはしけの音が聞こえる
裏窓からは
ときどきひとの別れが見える

CamScannerでスキャン

裏窓からは
あたしが見える
三年前はまだ若かった
裏窓からは
しあわせそうなふたりが見える

だけど夜風がバタン！
扉を閉じるよバタン！
また開くよバタン！
もうまぼろしは消えていた

裏窓からは
川が見える
あかりを消せば未練も消える
裏窓からは
別れたあとの女が見える

CamScannerでスキャン

山河(さんが)ありき

歌を忘れて
ひとり死ににに帰る
ふるさとの青い
山河は今も変ることなし

あの日
嫁(とつ)いで行くと決めたひとが
ひとりのままで死んで
ふるさとの谷の
みどりもあせた

死んで鳥になって

CamScannerでスキャン

あなたのお墓の空を
とびたい
せめてものあの日のお詫びに

もしも想い出したら
伝えておくれ
浮気女が帰ってきて
今日もふるさとの空を
さびしくとんでると

CamScannerでスキャン

生れてはみたけれど

生れてはみたけれど
父さん母さんいるじゃなし
洗濯干場のたそがれに
ぼんやり見ていた　渡り鳥

生れてはみたけれど
帰る故郷があるじゃなし
やさしいことばほしくなり
だまされにゆく　安酒場

生れてはみたけれど
筋も掟も知りませぬ

CamScannerでスキャン

妻も子もあるひとだけど
おしたいします　めくら花

生れてはみたけれど
妻という名にあこがれて
あなたの家の表札を
ぼんやり見ていた　赤とんぼ

CamScannerでスキャン

かもめ

おいらが恋した女は
港町のあばずれ　いつも
ドアーを開けたままで
着替えして
男たちの気をひく浮気女
かもめ　かもめ　笑っておくれ

おいらの恋はほんものの
港町の真夜中　いつも
ドアーの前を行ったり来たりしてる
だけどおいらにゃ手も出ない
かもめ　かもめ　笑っておくれ

CamScannerでスキャン

ところが或る夜　突然
成り上りの男が　ひとり
薔薇を両手いっぱいに
抱きかかえて
ほろ酔いで女のドアーをたたいた
かもめ　かもめ　笑っておくれ

女の枕許にゃ薔薇の
花が匂って　ふたり
抱きあってベッドに
いるのかと思うと
おいらの心はまっくらくら
かもめ　かもめ　笑っておくれ

おいらは恋した女の

CamScannerでスキャン

女将にとび込んで　ふいに
ジャック・ナイフを振りかざして
女の胸に赤い薔薇の贈物
かもめ　かもめ　かもめ

おいらが贈った薔薇は
港町にお似合だよ　たった
一輪ぎしで色あせる
かなしい恋の血の薔薇だもの
かもめ　かもめ　笑ってお呉れ

かもめ　かもめ
さよなら　あばよ

CamScannerでスキャン

山羊にひかれて

山羊にひかれてゆきたいの
遥かな国までゆきたいの
しあわせそれともふしあわせ
山のむこうに何がある

愛した人も　わかれた人も
大草原に　吹く風まかせ

山羊にひかれてゆきたいの
思い出だけをみちづれに
しあわせそれともふしあわせ
それをたずねて旅をゆく

CamScannerでスキャン

自伝的TERAYAMA体験

天童荒太

高齢の母が施設に入居し、実家をたたむことになった。

押入れの奥に進学で上京するまでの私物を詰めた箱を見つけ、中を整理するうち、懐かしいカセットテープが出てきた。東京に持ち帰ったが、さし迫って聴く必要はなく「いつかそのうち」と放置して……二年三年、この巻末エッセイを依頼されたことで、四年目に思いがけず機会が訪れた。

レコーダーにカセットをセットする。湿気でテープが付着して回らない懸念もあったが、雑音が続いた後、ピチョン、ピチョンと水滴の音が聞こえてきた。地下室に垂れる水漏れの音らしく、くぐもっている。やがて子守歌のような抒情的な音楽が流れてくる。音楽は広い空間にうつろに響く印象で、音割れがする。ああ、こういう音だったと思い出す。年間二百本以上の映画を映画館で観ていた高校生の頃、地方の天井の高い映画館では、俳優の台詞も流れる音楽

CamScannerでスキャン

も、音割れして耳に届いた。カビ臭い館内の独特のにおいが、四十四年ぶりに鼻の奥によみがえる。カセットのインデックスには、『1978・3・13 10：30～12：04　奥道後第三ホール』と録音した時と場所が書かれている。

その日のスクリーンに映され、私が小型のラジカセを持ち込んで、採録というシナリオに書き起こす勉強のために録音した映画は、寺山修司監督作品『ボクサー』だった。

外海の荒波に打たれ、冬は雪に閉ざされる青森生まれの、詩や短歌や俳句だけでなく、演劇、映画、放送劇、小説、競馬やボクシングの評論など、縦横無尽に活躍した天才と、穏やかな内海に面し、冬でも雪が稀な四国松山の、道後温泉という有名な観光地に生まれ育った、万事において生ぬるい私とは、本来ならまったく接点のあろうはずがなかった。

映画好きの田舎の子が高校一年の秋、映画監督になりたいという無謀な夢を抱かなければ、生涯TERAYAMAにふれることはなかった。憑かれたように映画にのめり込む過程で、著名な歌人であり、前衛的な演劇活動が世界で評価されている彼が、『書を捨てよ町へ出よう』『田園に死す』といったアート映画で多くの賞を得ているという話を、複数の映画記事で知った。だが当時四国

CamScannerでスキャン

で一番映画館が多かったであろう松山でも、独立系のアート映画は上映されず、主宰の劇団の公演も望むべくもなく、ひたすら悶々としていた。

そんなとき東映の看板スター菅原文太の推薦で、寺山監督によるボクシング映画が製作されるというニュースを目にした。大ヒットした『ロッキー』にあやかった企画に、若い頃ボクサーを目指してジムに通い、ボクシングの評論を書くなど、その道に精通している彼が監督として推薦されたのかもしれない。ただ、人生に迷っていたイタリア系の青年が、恋人と老トレーナーの支えを得て再起を期し、世界チャンプと互角に戦って感動を呼ぶハリウッド作品に比べ、寺山作品はすべてがマイナー調だった。地方出身の足に障害を持つ青年が、事故で恋仇を死なせ、その被害者の兄である、落ちぶれた元東洋チャンプの指導を受け、世界チャンピオン戦の前座である東日本新人王決勝戦がクライマックス……しかもオスカー作品のラストは、主人公と恋人の抱擁のストップモーションだが、寺山作品では、主人公は女に振られた末、ラストは菅原文太との抱擁のストップモーションである。

それでも、十七歳の私はこの映画を好きになった。全編にあふれるセンチメンタルに胸が締めつけられたからだ。決して甘い感傷ではない。この世界の仮借ない現実を冷めた目で見据え、あらかじめ社会や家庭から突き放され、見捨

CamScannerでスキャン

てられた者たちが、それでも運命や人生に抵抗しようとする姿……それはムダなあがきだ、現実は変わらない、と理解しつつも、せめて見守り、寄り添おうとする、現実主義のセンチメンタルに心が共振した。

だが十八歳で東京に出て以降、TERAYAMAを「センチメンタル」とする評価には出会わなかった。ついに観ることが叶った演劇実験室「天井桟敷」の公演では、訓練された肉体や芸術的な空間を生かして表現される知的冒険や理論構築の巧みさが目立ち、彼の評価もおおむね知や理の秀逸さに傾いていた。あらためて彼の映画・演劇だけでなく、詩や短歌などにふれて……物事の本質を、過去および未来へまで透徹して見抜く目を持ち、社会に何が受け入れられて何が反発を招くかを想像する賢明さを有し、とくに言葉をどう使えば、美や芸術性に彩られるか、世間の常識を挑発したり権力を指弾することができるか、あるいは一般の人々の郷愁を誘って心地よくさせ得るか、を熟知していると感じた。天賦の才はもちろん、当時の激変する社会や、家族をはじめ周囲の複雑な環境に揉まれる中で、必死につかみ取った言葉の魔力とでも呼ぶべきものが、多くの創作のうちに感得できる。

だから何でもできる、は言い過ぎでも、たいていの表現は高いレベルを保ち、

CamScannerでスキャン

評価も受ける。けれどやはり私が惹かれるのは、知的冒険や理論構築より、その隙間から漏れてくる情動的なセンチメンタルだ。たとえばその詩が流行り歌となって社会現象にまでなった「時には母のない子のように」という言葉の響きに満ちている、あらかじめ突き放され、見捨てられている者たちの心情に寄り添ったセンチメンタルを、私は愛する。

多才で多彩なTERAYAMAの根幹を成すものは、あらかじめ突き放され、見捨てられている者たちへの愛情だ。ときにそうした者らを罵倒し蔑むこともあるけれど、愛情と表裏一体の同族嫌悪に近く、根底には深い共感がある。

温暖な地に生まれ、生い立ちも平凡な私が、そんな彼に感応したのは、たぶん表現者になる夢にかぶれた〈外れ者〉であることと、地方出身者特有の劣等感を背負っていたことが大きい。田舎者は大都市に生まれ育った者に対し、あらかじめ突き放され、遅れているという感覚を意識的また無意識に抱いている。その負い目を的確に射貫いた上で、ときに挑発し、ときに慰撫するように表現したことで、六〇年代、多くの地方出身者が押し寄せていた東京を中心に、TERAYAMAは時代のヒーローとなり、七〇年代までそれは続く。

地方出身者のもう一つの特徴は、嘘で自分を鎧うことだ。大都市に対する劣等感を、嘘で覆い、懸命に背伸びし続ける。その背伸びを、本当の自分の背丈

CamScannerでスキャン

[redacted]

[redacted]

[redacted]

寺山修司・著者紹介

一九三五（昭和十）年、青森県弘前市に長男として誕生。四五年、警察官の父が戦病死、母が米軍三沢基地で働く。四八年、青森市立の中学に入学、文芸部で詩や俳句を創作。五一年、青森県立青森高校入学。新聞部・文芸部に入り、詩や短歌を発表。この頃「東奥日報」などに俳句を投稿、学生の俳句大会を主催。五四年、俳句雑誌「牧羊神」創刊。早稲田大学教育学部国語国文学科入学。「チエホフ祭」で「短歌研究」新人賞受賞。翌年、処女戯曲「忘れた領分」執筆。五七年、作品集『われに五月を』、翌年、歌集『空には本』。谷川俊太郎の勧めでラジオドラマも書き始める。六〇年、劇団四季で「血は立ったまま眠っている」が上演。女優・九條映子と知り合う。競馬場へ通い始める。大江健三郎らと「若い日本の会」に参加。評論・戯曲・詩歌を様々なメディアに発表。六四年、塚本邦雄らと青年歌人を組織。この頃ラジオ・テレビドラマで芸術祭奨励賞など受賞。六七年、横尾忠則や九條映子らと演劇実験室「天井桟敷」を設立。六九年、渋谷に天井桟敷館落成。作詞した「時には母のない子のように」がヒット。七一年、映画『書を捨てよ町へ出よう』でサンレモ映画祭グランプリ。パリなどで「邪宗門」他上演、映画や演劇の創作活動が評価され、時代の寵児に。七六年、『田園に死す』でカンヌ映画祭審査員特別賞。八三年、五月四日逝去。享年四十七歳。死後、三沢市に寺山修司記念館が開館。

（ハルキ文庫〈作成・白石征〉の年譜を参照しました。）

CamScannerでスキャン